

社会変化に伴う住居変容とその要因に関する研究

－ 椎葉村T集落を事例として －



AK12099 松岡 直輝

Keywords

横一列型住居 デイ 持田照夫
T神楽 中間領域 集落

1. はじめに

1.1 研究背景

かつての日本の農村では、日常生活と生業である農業が密接に関わっていた。しかし、戦後の農村では農作物の集約化や大型機械の導入などにより、大規模で効率化された生産形態へと農業を転換することが求められた。そうした転換は、村の共同作業の機会を激減させると同時に農業労働時間そのものを短縮させ、農作業に関する年中行事や人生儀礼、信仰、芸能など固有の文化の衰退にも繋がった。こうしたコミュニティ機能の弱体化から、家族形態及び住意識にも変化がもたらされ、住居空間に近代化による効率性をより一層多く導入する傾向が見られるようになった。

しかし、古い技術の中に留まろうとすることのない変化を重ねてきた一方で、住居や集落には居住者にとって利便性や効率性以外の意味のある内容が残されている。つまり、近代的な要求があるにも関わらず、従来の間取りや名称、空間概念といったものも踏襲されるのである。それ故に農村住居は都市的住居へは完全に変遷をしないで現在に至る。

1.2 研究目的

本研究では九州山地の集落を事例として、上述した社会背景の変化に伴う住居形態の変遷を明らかにし、伝統的形式の変容が希薄な空間に着目する。その要因と、それを可能にする構造を明らかにし、中山間地域における住居のあり方を探ることを本研究の目的とする。

さらに、伝統芸能や生業などの変化とその影響にも着目し、現代の農村の抱える問題と照らし合わせながら、最後に持続可能な集落のあり方について論述する。

1.3 研究方法

2015年8月18日から8月26日にわたり、宮崎県東臼杵郡椎葉村K地区T集落において、住居内および住居周辺の実測、各住居の住民への聞き取り調査を実施した。実測件数は9軒（他2軒は平面図を入手）、聞き取り件数は10軒である。聞き取り調査では居住者の生活スタイル、住居の間取りの変化、居室の使われ方、集落の活動等を中心に記録した。これらで得られた情報を中心に、住居がどのような変遷を経ていったのか分析を進める。

1.4 椎葉村の伝統的住居形式

従来の椎葉村住居の間取りは左右どちらからアプローチするかに関わりなくドジ、ウチネ、デイ、コザの順に並び、横一列型住居形式として構成される。ドジから離れるほど私的要素が薄いものになっていくのが特徴である。大きな住居ではウチネとデイの間にツボネといて、間口2間の部屋がある。デイとコザには敷居（盲長押）が通され、これより内側はオハラ、外側はシタハラと呼ばれ、一般の客はオハラへ入れなかった。

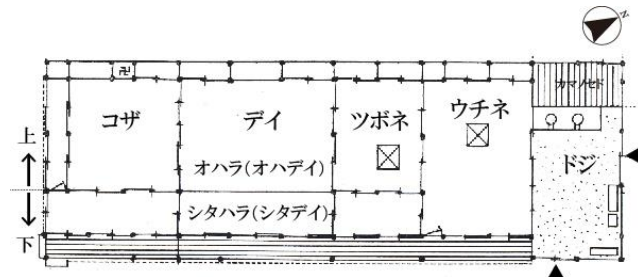


図1 伝統的住居の平面例
(国指定重要文化財 鶴富屋敷)

以下、各空間の特徴を記す。

コザ：オハラに神棚・仏壇が置かれ、日常的には使われない神聖な座とされる。シタハラが就寝場所となることが多い。

デイ：住居の正面に当たる最も広い空間で、通常は客間や、大人数が集まる際に使用される。盆や神楽の時は祭儀の空間として機能してきた。

ツボネ：若夫婦の寝室や、出産の際に使用される。住居の規模によっては設けられない場合もある。

ウチネ：日常的には家族が囲炉裏を囲みながら食事・休息等の場として使用する。

ドジ：食料加工のための作業場であり、決まった入り口は設けられていない。釜場の奥の板の間はカマノウシロあるいはカマノセドと呼ばれ、炊事道具の他、穀類、調味料、漬物等が置かれる。

1.5 既往研究

1986～1987年度に持田照夫らが、椎葉村内の10箇所の集落の調査から当時の住居空間の構成を明らかにした。住居で行われる行為とそれが行われる場所を把握し、村

民の生活を描き出している。さらに2013年度に賀根は、K地区Kw、Kz集落の調査において、現在の社会経済的状况下で横一列型住居の使われ方が持田のそれからどう変化しているかを究明した。本研究でも持田の手法に則り分析を進めると共に、現在の住居内の生活行為の比重の変化をT集落（K地区）の実情から考察する。

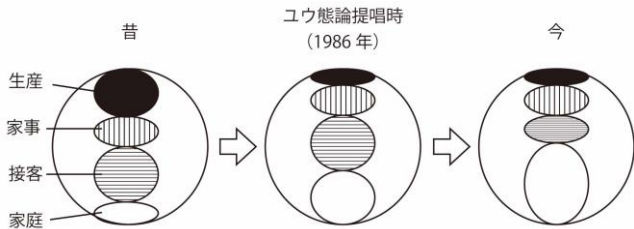


図2 農村住居内生活における行為の比重（賀根2013）

2. 調査地の概要

2.1 椎葉村の概要

椎葉村は宮崎県北西部の九州山地に位置し、急峻な山々に囲まれている。6～20戸から構成される64もの小規模農業集落が点在し、神楽などの行事はいくつかの集落を一つの地区として、地区単位で行われる。

2015年10月現在の人口は2,798人、総世帯数は1,175世帯であり、高齢化率は40%を超えている。

2.2 T集落の概要

T集落は、国道265号線と上椎葉ダムのダム湖である日向椎葉湖を挟んだ日当及び日添集落から構成される。湖からそびえる山の僅かな緩斜面に住居が建てられ、総人口は約80人、総世帯数は27世帯である。

2.2.1 T神楽

T神楽は、T神社に祀られる氏神（平田大明神）に対して行われる。平田大明神は大玉命ともいい、T集落日当、日添、臼杵又の3集落の氏神として祀られてきた。1968年までは民家を神楽宿として、この3集落において輪番制で神楽を行っていた。しかし、戦後以降、住居の様式替えなどで民家での開催が困難となり、T神社拝殿を改築して神楽を行うようになった（2015年度は住居開催）。

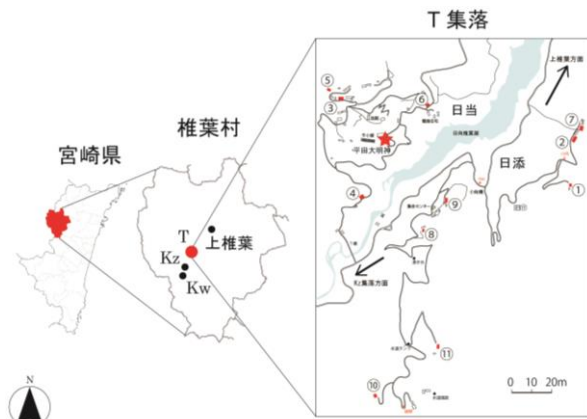


図3 調査対象地

3. T集落の住居

3.1 典型（伝統）的要素を持つ住居

以下の2つの指標に当てはまるものを椎葉村住居の典型的要素を残す住居とみなすと、調査対象としたT集落の住居11軒のうち9軒が当てはまる。

① 持田照夫が集約した椎葉村横一列型住居の平面構成の第二型群に属するもの。すなわち、空間構成が四列型の（ドジ・ウチネ・デイ・コザ）からなるもの、またはその変形したもの。

② ①に属し、改築部分及び年代がある程度明確であるもの。

3.2 増改築による間取の変化

戦前に建設された住居の建て替えもしくは改築が行われたのは、すべて1968年以降である（表1 塗りつぶし部分）。増改築が集中する年代などの傾向はつかめなかったが、T神楽が1968年を最後に輪番制で行われなくなったことと関連性があるといえる。

表1 各住居の竣工・増改築年度

住居no.	竣工	築年数(年)	建替え・改築等	その後の増改築
日添1	1765～1775年	約240～250	1982年	2005年
日添2	不明(インタビューなし)	不明	不明	不明
日当3	1715年	約300	大正時代(新築)	1978年
日当4	1986年	29		2014年
日当5	～1915年	約100	2000年	2012年
日当6	1875年	約140	2001年	
日添7	1715～1815年	約200～300、400?	1976年	
日添8	不明	不明	～1985年(新築)	
日添9	～1915年	約100	1980年	
日添10	数百年前	不明	1968年(新築)	1998年、2000年
日添11	明治初期	約140	1979～1980年	

増改築はドマ空間を中心に行われている。床上空間が発生し、台所や新たな居室及びかつては主屋内に配置されなかった便所や風呂などの水回り空間を設けるようになった。ドマを「玄関以外に土足で使用できる住居内空間」と定義すると、ドマは典型的要素を残す住居9軒のうち3軒にしかない。この要因は、前述した農村の社会変化及び神楽宿の廃止に加え、戦後の生活改善運動が考えられる。ドマ以外にも、コザやウチネに間仕切りを設けた例も見られた。また、昔は外部に開けていた縁側空間が全ての住居で消失し、アルミサッシによって内部へ組み込まれていた。以上の結果から、最も改築が行われにくい空間はデイであるとわかった。

かつて外壁は板張り真壁、屋根は茅葺であったが、今回調査した住居の多くは大壁となり、屋根材はスレート1軒、瓦5軒、鉄板5軒であった。屋根材の変化は、戦後の植林事業によって茅場が換金商品である杉林にかわり、茅が刈れなくなったことに由来している。

また、村民の暮らしぶりを大きく変化した上椎葉ダム建設（1951～1953年）が、住居や集落にも影響を与えたと考えた。しかし、調査の結果、現段階では住居変容とは直接の関わりがないとわかった。

3.3 住居の空間構成

持田が定義した（1986年）農村住居内の生活行為（①生産生活②家事生活③接客生活④家庭生活）を参考に、T集落の住居の使い方及び空間構成が持田の調査時（1984～1985年）から、どの程度変遷を遂げているのかを読み解く。

① 生産生活（アワやヒエ等の脱穀）

持田の調査時と同様に、T集落の住居内で生産生活に関連する空間は見られなかった。しかし、農作業に関連して土足で入れる水回り空間が11軒中8軒であったことから、住居の形式を決定づける要因として現存しているといえる。

② 家事生活（炊事及び洗濯行為）

システムキッチン設備が進化したのが、洗濯機の配置等に関しては大きな変化が見られないことを確認できた。

③ 接客生活（日常及び非日常生活）

ほぼ変わらずデイ（8軒）か、ウチネ（4軒）で接客が行われる傾向にあるとわかった。しかし、以前は住居で神楽や結婚式などの行事が行われていたが、現在では外部施設で執り行われるようになった。つまり、非日常における接客生活の縮小が起きている。

④ 家庭生活（就寝・食事・団欒）

持田の調査時では、食事及び団欒は旧ドマ部分とそれに接続するウチネやチャノマ、就寝はその空間を避けるようにデイやコザで行われていた。今回の調査では食事及び団欒は同様の傾向が見られたが、就寝はコザやデイ以外の居室（旧ウチネ2軒、旧ドマ1軒、名称なし3軒）も用いていた。以前に比べて居室を細分化させ、プライベート空間を設ける傾向が増加したといえる。

以上の分析から、T集落（K地区）の住居内における生活行為の比重の変化は下図のようになると結論付ける。

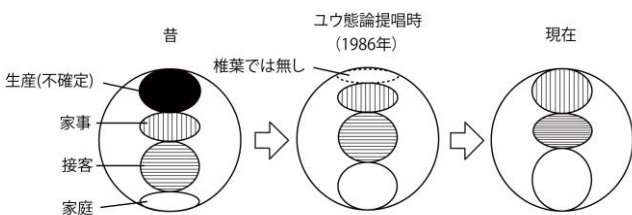


図4 T集落の住居内生活における行為の比重

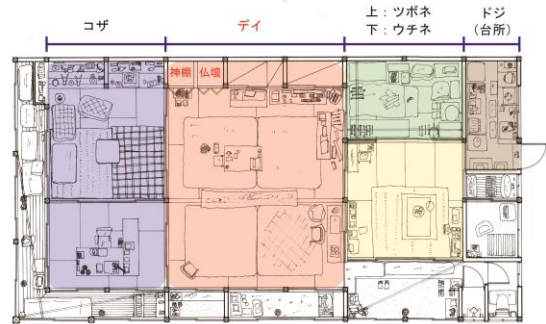
4. 住居と神楽の関連性

2015年12月5日の夕方から6日の朝にかけて行われたT神楽の参与観察調査を基に、現在の椎葉村住居と集落における神楽のあり方を考察する。日常と非日常（神楽）における住居の使われ方の違いから、デイが変容しない要因を神楽の面から捉える。

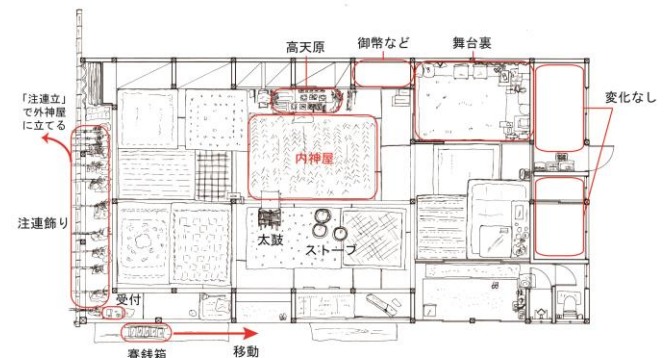
8月の調査時と比較すると（図5）、住居内の多くの建具が外されているのがわかる。デイ（オハラ）には高天原（神様の依り代となる場所）が置かれ、舞処として機能

能する神聖な空間になる。その他のコザやウチネは観客席となる。人が頻繁に移動するため、住居内には出来るだけ遮るものがないのが好ましく、間仕切りが多く見られるようになった住居での開催は困難であるとわかる。

ドマ空間の消失によって、演目の内容の変更や、直会（なおらい）のための炊事空間が庭へ移動した点が見られた。また、男女の座の違いがデイ（オハラ）とウチネには残っていることがわかった。



日常における住居（2015年8月21日）



非日常（神楽）における住居（2015年12月5日 神楽開始前）

図5 日常と神楽における住居（日当No.6）比較

これらの分析から、T集落はKw及びKz集落に比べ神楽の影響を強く受けていると考える。また、T集落で調査対象とした全ての住居で、神楽に用いられる御幣や高天原に供奉された浄の幣を飾る神棚を確認できた（Kw集落は10軒中6軒、Kz集落は8軒中4軒のみである）。

5. 考察

5.1 中間領域

ここで用いる「中間領域」とは、縁側や敷居など、住居と外部空間をつなぐ重要な領域を指す。前述したように、T集落の住居ではこの空間が消失し、住居が外部に対して閉鎖化していると捉えられる。鈴木成文（1999）によれば、この現象によって、近隣の村民との関係が疎遠になり、共同作業や儀礼に支障が生まれ、ますます住居が閉鎖的になる。

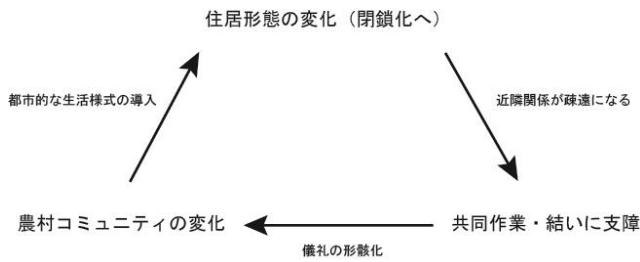


図6 住居の閉鎖化による循環

しかし、T集落の場合は、神楽を基盤とした相互扶助の関係が構築されている点が大きいと考える。また、かつての中間領域を代替する空間が発生している点にも留意したい。例えば持田の調査時に、接客空間が玄関近くの居室（ウチネ、チャノマ）へ移行した例があった。T集落でも、かつては団欒の場であったウチネや旧ウチネで接客を行う住居が9軒中6軒見られたのである。また、集落センターなどの外部施設も近隣づきあいの場として利用されていることから、住居内ではなく集落の決まった場所へ変化した可能性も考えられる。

5.2 まとめ

変容が最も希薄なデイを中心に論述する。デイが改築の対象となりにくいのは、大人数に対する接客空間が必要とされる他、集落における居住者の心理的な面も重要だと考えられる。神楽の際にデイのオハラが内神屋となり、神聖な舞処へ変化することは既に示した。このことから増改築の際は、やはりデイには手をつけづらいと考えられる。山岳信仰の中心をなす神楽を背景として生まれ、保持されてきた慣習や伝承が居住者にとって暗黙の制約となっているのである。この作用によって集落内で自分の住居だけ勝手にする、すなわち、つくり変えるという自由が生まれにくいのだと考える。

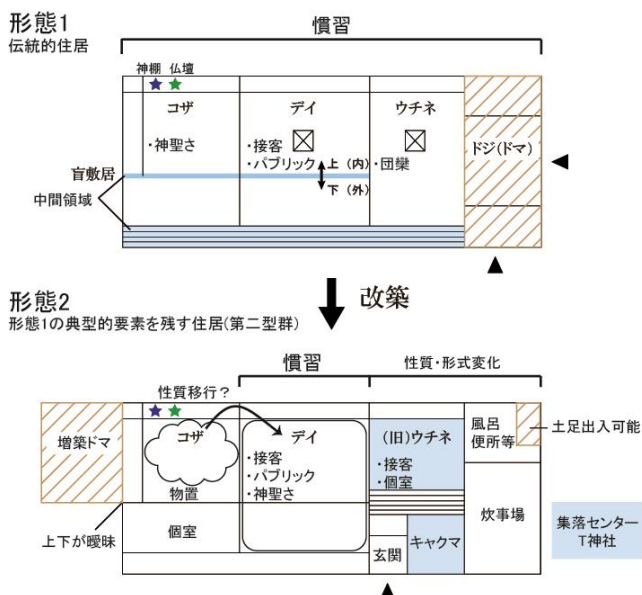


図7 T集落（K地区）における住居変容の段階例

神聖な空間であるコザの性質がデイに移行したと仮定すると、元来から集落的な空間であったデイの性質がさらに強化される。つまり、もともとあった慣習の力が依然として強くT集落の住居には働いているのである。従って、デイは伝統的形式からの変容が希薄なのではないだろうか。昔はこうした制約が住居全体に働いていたと推察できる。

6. おわりに

T集落における研究を踏まえて、住居群の極端な閉鎖化は、コミュニティの存続に関わることを強調しなければならない。村民同士のつながりが消滅すると、居住のみを目的とする集落へ化してしまうのである。やはり農村住居内には近隣の住民との会話を楽しむ場所など、パブリックな空間が必須といえる。また、集落の持続のためには信仰などの観念を共有すべきであると考え。なぜなら、神棚や荒神を祀る儀礼空間となる場所は、空間構成の中心となるためである。以下では住居に限定せず、持続可能な集落のあり方を考える。

1908年に柳田國男は椎葉村を訪れ、そこで村民たちの協同自助の精神を目撃した。平地には見られない農業慣行や、村民自らの手で作り上げた「椎葉村是」（今日の地域振興計画書）、猪狩の形態は当時の柳田の理想としていた産業組合の精神そのものであった。一方、現在の椎葉村では柳田が目撃した焼畑や狩猟による生活形態は廃れ、結いの活動も希薄になっている。加えて、半世紀以上にわたる人口減少の歯止めがきかない状況でもある。しかしながら、そのような中でも集落を内発的に活性化し、生き生きとした生活を送ろうとする村民たちがいることを忘れてはならないだろう。

行政村をはじめとする地方自治体は、このような「村の精神」を育てていけるような自律と自治の仕組みを織り込んでいかなければならないと考える。今後は社会保障を中心とした格差是正の国策に頼りきりになるのではなく、地方独自の発展を遂げ、かつての結いの自助精神を取り戻すことが重要ではないだろうか。そうした地域を主体とする自主的な動きが起これば、中山間地域の社会が持続していくはずである。

参考文献

- 1) 杉本尚次「九州地方の民家」、明玄書房、1977年
- 2) 持田照夫「佝態論」、学芸出版社、1986年
- 3) 持田照夫「横一列型住宅に見られる空間構成の規則性に関する研究（その1～その6）」、1986、1987年
- 4) 鈴木成文「住まいを読む—現代日本住居論」、建築資料研究社、1999年
- 5) 佐藤快信「農村社会の変化に関する一考察」、2010年
- 6) 賀根麻由美「中山間地域における住居の形式および使い方の現代的様態に関する研究」、2013年